

芥川龍之介

大川の水





# 大川の水 (A.R.S.)



自分は、大川端に近い町に生まれた。家を出て椎しいの若葉に掩おおわれた、黒塀の多い横網の小路をぬけると、直すぐあの幅の広い川筋の見渡される、百本杭ぐいの河岸かしへ出るのがある。幼い時から、中学を卒業するまで、自分は殆ほとんど毎日のように、あの川を見た。水と船と橋と砂洲と、水の上上に生まれて水の上上に暮しているあわただしい人々の生活活とを見た。真夏の日の午すぎ、燬やけた砂を踏みながら、水泳を習いに行く通りすがりに、嗅ぐともなく嗅いだ河の水ののにおいも、今では年とともに、親しく思い出され

るような気がする。

自分はどうして、こうもあの川を愛するのか。あのどちらかと言えば、泥濁りのした大川の生暖い水に、限らない床しさを感ずるのか。自分ながらも、少しく、その説明に苦しまずにはいられない。唯、ただ自分は、昔からあの水を見る毎に、何となく、涙を落したような、云い難い慰安と寂寥とを感じた。まった完く、自分の住んでいる世界から遠ざかって、なつかしい思慕と追憶との国にはいるような心もちがした。この心もちの為に、この慰安と寂寥とを味い得るが為に、自分は何よりも大川の水を

愛するのである。

銀灰色の靄と青い油のような川の水と、吐息のような、  
覚束おぼつかない汽笛の音と、石炭船の鳶色とびいろの三角帆と、――す  
べて止み難い哀愁をよび起す是等の川の川のながめは、如何  
に自分の幼い心を、その岸に立つ楊柳ようりゆうの葉の如くおの  
のかせたことであろう。

この三年間、自分は山の手の郊外に、雑木林のかげに  
なっている書齋で、平静な読書三昧に耽っていたが、そ  
れでも猶なお、月に二、三度は、あの大川の水を眺めにゆく  
ことを忘れなかった。動くともなく動き、流るるともな

く流れる大川の水の色は、静寂な書斎の空気が休みなく与える刺戟と緊張とに、切ない程あわただしく、動いている自分の心をも、丁度、長旅に出た巡礼が、漸く又故郷ふるさとの土を踏んだ時のような、さびしい、自由な、なつかしさにとかしてくれる。大川の水があつて、始めて自分は再、純なる本来の感情に生きることが出来るのである。

自分は幾度となく、青い水に臨んだアカシアが、初夏のやわらかな風にふかれて、ほろほろと白い花を落すのを見た。自分は幾度となく、霧の多い十一月の夜に、暗い水の空を寒むそうに鳴く、千鳥の声を聞いた。自分の



見、自分の聞くすべてのものは、ことごとく 悉、大川に対する  
 自分の愛を新にする。丁度、夏川の水から生まれる黒蜻蛉くろとんぼ  
 の羽のような、おののき易い少年の心は、その度に新な  
 驚異の眸を見はらずにはいられないのである。殊に夜網  
 の船の舷ふなばたに倚って、音もなく流れる、黒い川を凝視みつめ  
 ながら、夜と水との中に漂う「死」の呼吸を感じた時、  
 如何に自分は、たよりのない淋しさに迫られたことであ  
 ろう。

大川の流れを見る毎に、自分は、あの僧院の鐘の音と、  
 鶺鴒くぐいの声とに暮れて行く伊太利亞イタリヤの水の都——バルコン

にさく薔薇も百合も、水底に沈んだような月の光に青ざめて、黒い柩ひつぎに似たゴンドラが、その中を橋から橋へ、夢のように漕いでゆく、ヴェネチアの風物に、溢るるばかりの熱情を注いだダンヌンチョの心もちを、今更のように慕わしく、思い出さずにはいられないのである。

この大川の水に撫愛される沿岸の町々は皆自分にとって、忘れがたい、なつかしい町である。吾妻橋から川下ならば、駒形、並木、蔵前、代地、柳橋、或は多田の薬師前、うめ堀、横網の川岸——何処でもよい。是等の町々

を通る人の耳には、日をうけた土蔵の白壁と白壁との間から、格子戸こうしどづくりの薄暗い家と家との間から、或あるいは銀茶色の芽をふいた、柳とアカシアとの並樹の間から、磨いた硝子板のように、青く光る大川の水は、その、冷な潮の匂いと共に、昔ながら南へ流れる、懐しいひびきをつたえてくれるだろう。ああ、その水の声のなつかしさ、つぶやくように、拗すねるように、舌うつように、草の汁をしぼった青い水は、日も夜も同じように、両岸の石崖を洗ってゆく。班女はんじよと云い、業平なりひらと云う武蔵野の昔は知らず、遠くは多くの江戸浄瑠璃作者、近くは河竹黙

阿弥翁が、せんそうじ浅草寺の鐘の音と共に、その殺し場のシユチ  
 ンムングを、最力強く表わす為に、しばしば屢々、その世話物の  
 中に用いたものは、実にこの大川のさびしい水の響であ  
 った。いざよいせいしん十六夜清心が身をなげた時にも、げんのじよう源之丞が鳥追  
 姿のおこよを見染めた時にも、また或は又、いかけやまつごろう鑄掛屋松五郎が  
 蝙蝠の飛交う夏の夕ぐれに、てんびん天秤をにないながら両国の  
 橋を通った時にも、大川は今の如く、船宿の棧橋に、岸  
 の青芦に、ちよきぶね猪牙船の船腹に懶いささやきを繰返していた  
 のである。

殊にこの水の音をなつかしく聞く事の出来るのは渡し

船の中であろう。自分の記憶に誤りがないならば、吾妻橋あづまばしから新大橋までの間に、元は五つの渡しがあった。その中で、駒形の渡し、富士見の渡し、安宅あたくの渡しの三つは次第に一つずつ、何時となく廃れて、今では唯一ただの橋から浜町へ渡る渡しと、御蔵橋おくらばしから須賀町へ渡る渡しとの二つが、昔のままに残っている。自分が子供の時に比べれば、河の流れも変り、芦荻ろてきの茂った所々の砂洲も跡方なく埋められてしまったが、この二つの渡しだけは、同じような底の浅い舟に、同じような老人の船頭をのせて、岸の柳の葉のように青い河の水を、今も変りなく日に幾

度か横ぎっているのである。自分はよく、何の用もないのに、この渡し船に乗った。水の動くのにつれて、摇篮のように軽く体をゆすられる心ちよさ。殊に時刻が遅ければ遅い程、渡し船のさびしさとうれしさとがしみじみと身にしみる。——低い舷の外は直に緑色の滑な水で、青銅のような鈍い光のある、幅の広い川面は、遠い新大橋に遮られるまで、唯一目に見渡される。兩岸の家々はもう、黄昏たそがれの鼠色に統一されて、その所々には障子にうつる灯ともしびの光さえ黄色く靄の中に浮んでいる。上げ潮につれて灰色の帆を半なかば、張った伝馬船が一艘、二艘と稀

に川を上って来るが、何の船もひっそりと静まって、舵を執る人の有無さえもわからない。自分は何時もこの静かな船の帆と、青く平に流れる潮のにおいとに対して、何と云うこともなく、ホフマンスタアルのエアレエプニスという詩をよんだ時のような、云いようなないさびしさを感じると共に、自分の心の中にも亦、情緒の水の唄また ささやきが、靄の底を流れる大川の水と同じ旋律をうたっているような気がせずにはいられないのである。

けれ共、自分を魅するものは独り大川の水の響ばかり

ではない。自分にとっては、この川の水の光が ほんとはんど 殆ど、  
 何処にも見出し難い、滑さと暖さを持つているように  
 思われるのである。

海の水は、たとえば碧 ヂヤスパア 玉の色のように余りに重く緑

を凝している。と云つて潮の満干を全く感じない上流の

川の水は、云わば緑柱石 エメラルド の色のように、あまりに軽く、

余りに薄っぺらに光りすぎる。唯淡水と潮水とが交錯す

る平原の大河の水は、冷な青に、濁った黄の暖みを交え

て、何処となく人間 ヒューマナイズ 化された、親しさと、人間らしい

意味に於て、ライフライクな、なつかしさがあつたように



思われる。殊に大川は、あか赭ちやけた粘土の多い関東平野  
を行きつくして、「東京」と云う大都会を静かに流れて  
いるだけに、その濁って、皺をよせて、気むずかしい猶太ユダヤ  
の老爺のように、ぶつぶつ口小言を云う水の色が、如何  
にも落付いた、人なつかしい、手ざわりのいい感じを持  
っている。そうして、同じく市の中を流れるにしても、  
猶「海」と云う大きな神秘と絶えず、直接の交通を続け  
ている為か、川と川をつなぐ掘割の水のように暗くな  
い。眠っていない。何処となく、生きて動いていると云  
う気がする。しかもその動いてゆく先は、無始無終に亘わた

る「永遠」の不可思議だと云う気がする。吾妻橋、厩橋うまやばし、  
 両国橋の間、香油のような青い水が大きな橋台の花崗石かこうせき  
 と煉瓦れんがとをひたしてゆくうれしさは云う迄もない。岸に  
 近く、船宿の白い行灯をうつし、銀の葉うらを翻す柳を  
 うつし、又水門にせかれては三味線の音のぬるむ昼すぎ  
 を、紅芙蓉べにふようの花になげきながら、氣のよわい家鴨あひるの羽に  
 みだされて、人氣のない廚くりやの下を静に光りながら流れ  
 るのも、その重々しい水の色に云う可らざる温情を蔵し  
 ている。たとえば、両国橋、新大橋、永代橋と、河口に近  
 づくに従って、川の水は、著しく暖潮しんらんしよくの深藍色を交え

ながら、騒音と煙塵とにみちた空気の下に、白く爛れた  
 目をぎらぎらとブリキのように反射して、石炭を積んだ  
 達磨船だるまぶねや白ペンキの剥はげげた古風な汽船をものうげに揺ぶ  
 っているにしても、自然の呼吸と人間の呼吸とが落ち合  
 って何時の間にか融合した都会の水の色の暖さは、容易  
 に消えてしまうものではない。

殊に日暮れ、川の上に立ちこめる水蒸気と次第に暗く  
 なる夕空の薄明うすあかりとは、この大川の水をして殆、比喻を  
 絶した、微妙な色調を帯ばしめる。自分はひとり、渡し  
 船の舷に肘をついて、もう靄の下りかけた、薄暮の川の

水面を何と云う事もなく見渡しながら、その暗緑色の水のあなた、暗い家々の空に大きな赤い月の出を見て、思わず涙を流したのを、恐らく終世忘れることはできないであろう。

「すべての市は、その市に固有なおいを持っている。フロレンスのおいは、イリスの白い花と埃と靄と古の絵画のニスとのおいである」（メレジュコウフスキイ）もし自分に「東京」のおいを問う人があるならば、自分は大川の水のおいと答えるのに何の躊躇もしないであろう。独においのみではない。大川の水の色、大川の

水のひびきは、我愛する「東京」の色であり、声でなければならぬ。自分は大川あるが故に、「東京」を愛し、「東京」あるが故に、生活を愛するのである。(一九一  
二・一)

その後「二の橋の渡し」の絶えたことをきいた。「御蔵橋の渡し」の廃れるのも間があるまい。



日本文学電子図書館

---

「芥川龍之介随筆集」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2014年3月14日 第1刷発行

---



日本文学電子図書館